

修士論文（要旨）
2017年7月

ホームヘルパーの生活援助における自立支援のあり方に関する研究
－要支援高齢者に焦点を当てて－

指導 白澤 政和 教授

老年学研究科

老年学専攻

215J6901

呉 迪

Master's Thesis(Abstract)

July 2017

A Study of Fostering Independence among the Elderly Requiring Support by
Home Helpers

Wu Di

215J6901

Master's Program in Gerontology

Graduate School of Gerontology

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Masakazu Shirasawa

目次

| | |
|-------------------|---|
| 第1章 緒言..... | 1 |
| 1.1 研究背景..... | 1 |
| 1.2 先行研究..... | 1 |
| 1.3 研究の目的と意義..... | 1 |
| 第2章 研究方法..... | 1 |
| 2.1 調査対象者..... | 1 |
| 2.2 調査方法..... | 1 |
| 2.3 分析方法..... | 1 |
| 第3章 研究結果..... | 2 |
| 第4章 考察..... | 2 |

引用文献

第1章 緒言

1.1 研究背景

日本の高齢者介護問題を解決するため、2000年から介護保険が実施された。介護保険の目標は「介護を必要とする状態になっても、自立した生活を送り人生の最後まで人間としての尊厳を全うできるような社会支援の仕組み」であり、その基本理念は「利用者本位、高齢者の自立支援、自己決定」と提言されている。しかしながら、自立支援とは一体何かについての公式な記述がなく、その具体的な捉え方も様々である。また、介護が必要となった場合に、自宅で介護を受けたいという希望を持つ人は74%となっており¹²⁾、要介護者となっても、高齢者が尊厳を持って、できる限り住み慣れた地域で生活を継続できることを願っている。しかし、2012年度の介護報酬改定で、訪問介護の生活援助の提供時間は縮減され、2014年の介護保険制度改正で、「要支援1・2」といった軽度者を対象としたサービスが一部経過措置を踏まえて、予防給付から「地域支援事業」に移行され、介護予防・日常生活支援総合事業として位置づけることになった。このようなことをきっかけに、生活援助の意義をもう一度検討する必要性が生じてきた。しかも、高齢者が訪問介護サービスを利用している場合、多様な専門職の中で、ホームヘルパーは当事者と接する機会が最も多いのが現状であり、その人の生活史に密着した情報は、利用者と常に接しているホームヘルパーならでこそ、ケアの中から把握することができる。このため、本論文では、在宅の生活援助の部分について、ホームヘルパーはどのような工夫して、自立の支援をしているかを明らかにしたい。

1.2 先行研究

要支援者に向けて、ホームヘルパーの生活援助における自立支援に関する先行研究は、生活援助の役割及びホームヘルパーの援助実態¹⁸⁾¹⁹⁾²⁰⁾²¹⁾²²⁾²³⁾、要支援高齢者像及び介護予防訪問介護サービス利用実態²⁴⁾²⁵⁾²⁶⁾²⁷⁾²⁸⁾²⁹⁾³⁰⁾³¹⁾、自立支援の方法³²⁾³³⁾³⁴⁾³⁵⁾³⁶⁾³⁷⁾³⁸⁾の3つの角度から進められている。

1.3 研究の目的と意義

本研究の目的は、ホームヘルパーの視点から、要支援高齢者に対する生活援助における自立支援のあり方を明らかにすることにある。本研究により、ホームヘルパーが生活援助を必要としている要支援高齢者に対し、自立に向けてどのような支援しているかを調査することで、生活援助における自立支援のあり方を提言できるものと考えられる。

第2章 研究方法

2.1 調査対象者

介護経験年数が長いホームヘルパーほど生活援助での自立支援についての考え方が蓄積できていると考えられるため、依頼可能な訪問介護事業所の所長を選び、所長から生活援助が必要としている要支援高齢者に対応経験があり、介護経験年数の長いホームヘルパーを推薦していただくよう依頼する。

2.2 調査方法

研究協力の同意が得られた調査対象者に対して、事業所を訪問し、プライバシーが確保できる個室で半構造化インタビューを行う。インタビューガイドの内容は、ホームヘルパーの立場から、高齢者の自立に対してどういうふうに考えているのかななどである。インタビューは、許可を得てICレコーダーに録音し、録音データを逐語に起稿する。

2.3 分析方法

本研究は、佐藤による定性的コーディングによる分析手順をとる³⁹⁾。要支援高齢者の自立に向けて、ホームヘルパーの援助内容、方法、姿勢に関する内容に注目して、逐語

録を読み込み、文脈や意味のまとまりをもつ文書セグメントを切り出し、コードを割り当て（コーディング・コード化）、コード間の類似性を見ながら、コードの構造を編集し、特定のコードの割り当てられた分節の一覧を通覧し、コード間の異質性がないか見直し再編集し、コードのまとまりを〔サブカテゴリー〕、その上位を〈カテゴリー〉、さらに上位を【中核カテゴリー】として行う。

第3章 研究結果

テーマにかかわる全コード数は84個で、要支援高齢者の自立支援について【自立支援を実現するための視点】と【自立に向けての支援内容】の2つの中核カテゴリーにまとまった。【自立支援を実現するための視点】は、以下3つのカテゴリーより構成される。第一に、〈利用者の個性に基づく支援〉とは、〔性別の違いにより、男女それぞれに合わせる支援〕と〔個人に合わせる支援〕のことである。第二に、〈利用者の継続性を確保する支援〉とは、〔身体的機能を維持するための支援〕と〔自分らしい生活を維持するための支援〕のことである。第三に、〈利用者の主体性を実現する支援〉とは、〔利用者の尊厳を支える〕のことである。【自立に向けての支援内容】は、以下3つのカテゴリーより構成される。第一に、〈利用者との信頼関係づくり〉である。〔事前に利用者の情報を手に入れる〕、〔利用者とのコミュニケーションの深まり〕、〔利用者に耳を傾ける〕、〔利用者の生活リズムに合わせ、話への支持、相槌などをする〕ことで、信頼関係を作る。第二に、〈利用者の自立を実現するための働きかけを作り出す方法〉とは、利用者の自立を理解したり、利用者との会話から、生活習慣、こだわり等を見つけたり、訪問する度に、家の様子と変化を観察したり、ホームヘルパーが支援過程からもらった情報をケアマネジャー、事業所などと共有し、各職種と連携作業をしたりするように、〔利用者の自立に対する理解〕、〔会話を通して、利用者のニーズを的確に把握〕、〔利用者本人及び生活環境の観察〕、〔関与しているサービス間での連携〕することで、自立の目的を達成する。第三に、〈利用者の生活意欲の引き出し〉とは、〔利用者の引きこもりの予防〕、〔利用者の趣味、嗜好等を考慮した話題提供〕、〔過剰介護への配慮〕、〔利用者自分に前向きな目標を持たせる〕である。

第4章 考察

ホームヘルパーは要支援高齢者に対して、【自立に向けての支援内容】を行っている際に、【自立支援を実現するための視点】がなされている。これは、ある意味では、自立支援に向けての考え方を意識して、自立に向けた支援がなされているといえる。

ホームヘルパーから見る自立支援の方法については、本研究の調査結果からみると、ホームヘルパーは利用者との信頼関係を作る上で、利用者の自立を実現するための働きかけを作り出し、意欲を引き出すことによって、自立支援を実現する。事前に利用者に関する情報を手に入れたり、コミュニケーションを作ったり、利用者の話を傾聴したり、利用者の生活リズムに合わせ、話への支持、相槌、促しなどをしたりした。そして、この部分でも、コミュニケーションの役割及び重要性が示している。特に、利用者との会話から、生活習慣やこだわりを見つけたり、できることをさりげなく探ったり、一番必要としていることを読み取ったりすることができる。続いて、訪問する度に、利用者の家の様子及び変化を観察して、できることとできなくなったことを見つけるような利用者の本人及び生活環境を観察することで、支援のペースが決められる。最後に、利用者の生活意欲を引き出すために、一つは利用者の引きこもりを防ぐことへの工夫である。もう一つは利用者自身に前向きのような目標を持たせることである。ホームヘルパーはその目標を知ることで、実現して

あげるために、支援を作りだすことが重要である。

【自立支援を実現するための視点】としては、第一に、利用者の個別性に基づく支援である。性別の違いから言うと、女性の利用者は家事のやり方へのこだわりを持っていたり、男性の利用者は家事をする習慣がなかったりすることがあるため、それぞれへのアプローチも違う。個人の違いから言うと、この利用者の性格、ライフスタイル、健康状態などに合わせ、その人の自立の仕方を見つけることが重要である。第二に、利用者の継続性を確保する支援である。本研究の調査結果からみると、まず、身体機能を維持するための利用者の残存能力を活かす支援が重要だと分かった。主に、ホームヘルパーは利用者のできる範囲の一部だけ頼むという家事を分担したり、共に行ったりすることが多い。この上、利用者が自分の力でできるような方法を教えてあげたり、アイデアを提供したりすることも、石坂²²⁾の事例と一致した。このように、掃除のやり方を教わりながら一緒に行うことで、できている部分を大事に自信につなげ、限られた時間の中で懸命に利用者の能力を引き出すことができる。第三に、利用者の主体性を実現する支援である。利用者の尊厳を支えることは介護保険制度の内容と一致した。その内容は主に利用者の長い間積み重ねてきた自分らしさを尊重し、崩さないように支援したり、自己選択してもらったりすることである。このような視点を持つことで、自立支援を実現するための基盤だと考えている。

引用文献

- 1) 総務省統計局:平成 27 年国勢調査抽出速報集計結果.
<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/pdf/gaiyou1.pdf>.
- 2) 厚生労働省:平成 27 年介護保険事業状況報告の概要.
<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/m15/d1/1504a.pdf>.
- 3) 結城康博:日本の介護システム.政策決定過程と現場ニーズの分析,71-73,岩場書店,東京(2011).
- 4) 厚生労働省:2015 年の高齢者介護 高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて.
<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/3.html>.
- 5) 白澤政和:介護保険制度のあるべき姿,89-90,筒井書店,東京(2011).
- 6) 介護職員初任者研修課程テキスト 1,介護・福祉サービスの理解,89-102,日本医療企画,東京(2014).
- 7) 全国介護事業者協議会:平成 25 年度老人保健健康推進等事業「いかにして自立を支えるか自立支援のため仕組みづくりを目指して」.7,東京(2014).
- 8) 後藤喜美子:在宅における要介護者の自立に対する思いと介護職の自立支援への考え方(意識)に関する研究(Ⅱ).JSCI 自立支援介護学,6(2):112-119(2013).
- 9) 日本社会福祉士会:介護支援専門員の資質向上と今後の在り方に関する検討会,介護支援専門員の資質向上と今後の在り方について.(2012).
- 10) 白澤政和:ケアマネジメントの有効性を考える⑬利用者の自立支援,(2014)
- 11) 全国介護事業者協議会:平成 25 年度老人保健健康推進等事業「いかにして自立を支えるか自立支援のため仕組みづくりを目指して」.2,東京(2014).
- 12) 厚生労働省:2011 年介護保険制度に関する国民の皆さまからのご意見募集結果概要について.
www.mhlw.go.jp/public/kekka/2010/p0517-1.html.
- 13) 結城康博,松下やえ子,中塚さちよ:介護保険改正でホームヘルパーの生活援助は変わるのか,12-13,ミネルヴァ書房,京都(2014).
- 14) 大和田猛,加賀谷真紀:ホームヘルパーにおける生活援助としてのコミュニケーションスキル;青森県内におけるホームヘルパーのアンケート調査結果を通して.青森県立保健大学雑誌,9(1):21-28(2008).
- 15) 後藤喜美子:在宅における要介護者の自立に対する思いと介護職の自立支援への考え方(意識)に関する研究(Ⅰ).JSCI 自立支援介護学,6(2):104-110(2013).
- 16) 社会保障審議会:介護保健部会,軽度者への支援の在り方(参考資料)(2016).
- 17) 桜庭葉子:要支援・要介護高齢者はそんな手厚い介護を受けているのか.総合社会福祉研究,(43):110-118(2014).
- 18) 井上千津子:生活援助—専門職としての視点;生活援助(家事)の役割と専門性.ホームヘルパー,(405):8-10(2009).
- 19) 八田和子:訪問介護における家事援助の実態と自立支援の課題;訪問介護利用者・訪問介護員調査を踏まえて.大阪健康福祉短期大学紀要,(2):60-69(2004).
- 20) 須加美明:訪問介護の評価と専門性,275-281,日本評論社,東京(2013).
- 21) 須加美明:訪問介護の評価と専門性,294,日本評論社,東京(2013).
- 22) 石坂誠:生活保障労働としての生活援助を考える;社会福祉労働としてのホームヘルパーの生活援助の分析と考察から.(2014).
- 23) 水野明美:訪問介護どうなる;生活援助のエビデンス.月刊ケアマネジメント,(12):

20-25 (2010) .

- 24) 金憲経ら：介護保険制度における後期高齢要支援者の生活機能の特徴. 日本公衛誌, (50)5 : 446-454 (2003) .
- 25) 日本総合研究所：要支援者の自立支援のためのケアマネジメント事例集. 6 (2013) .
- 26) 金美辰, 井上修一：介護予防通所介護利用者の日常生活機能の低下要因. 大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究, (15) : 59-67 (2013) .
- 27) 金憲経ら：介護保険制度における後期高齢要支援者の生活機能の特徴. 日本公衛誌, (50)5 : 446-454 (2003) .
- 28) 三浦研ら：要支援・軽度要介護者の生活機能の差異とその特徴. 生活科学研究誌, (6) : 1-10 (2007) .
- 29) 長谷川直人ら：居宅要支援高齢者の健康状態と健康管理の特徴；前期・後期高齢者別の検討. 厚生指標, (57)2 : 35-42 (2010) .
- 30) 結城康博, 松下やえ子, 中塚さちよ：介護保険改正でホームヘルパーの生活援助は変わるのか, 196, ミネルヴァ書房, 京都 (2014) .
- 31) 結城康博, 松下やえ子, 中塚さちよ：介護保険改正でホームヘルパーの生活援助は変わるのか, 210, ミネルヴァ書房, 京都 (2014) .
- 32) 東京都老人総合研究所：中年から老化予防に関する医学的研究；サクセスフルエイジングを目指して. 長期プロジェクト研究報告書, 86-93 (2000) .
- 33) 白澤政和：ケアマネジメントの有効性を考える⑬利用者の自立支援, (2014) .
- 34) 介護支援専門員実務研修テキスト, 長寿社会開発センター, 東京 (2012) .
- 35) 後藤喜美子：在宅における要介護者の自立に対する思いと介護職の自立支援への考え方（意識）に関する研究（Ⅰ）. JSCI 自立支援介護学, 6(2) : 104-110 (2013) .
- 36) 後藤喜美子：要介護者の自立に対する家族の考え方（意識）とその関連要因に関する研究. JSCI 自立支援介護学, 4(1) : 64-69 (2010) .
- 37) 内田陽子：在宅ケア利用者の自立促進に有効なケアに関する研究；IADL、ADL、意欲改善得点とケア実施率との関連分析. 日看管会誌, 7(2) : 31-40 (2004) .
- 38) 須加美明：訪問介護の評価と専門性, 275-285, 日本評論社, 東京 (2013) .
- 38) 佐藤郁哉：QDA ソフトを活用する. 実践 質的データ分析入門, 15-55, 新曜社, 東京 (2008)